

鎌倉時代の石の井戸

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 鎌倉時代の板の井戸（写真左）と石の井戸（写真右）

井戸とは 人が生活していくうえで、水はたいへん大切です。現在では、水道の蛇口をひねればすぐに水が出てきますが、昔はどうだったのでしょうか。家の近くに川や湧き水があれば、水はすぐ手に入るのですが、なかなかそうはまいません。そこで人は、手近な場所に穴を深く掘って地下水を得ようと知恵を出しました。それで作られたのが井戸です。井戸は深い穴なので、埋まった後でも地中でよく残ります。発掘調査では昔の井戸の跡がよく見つかります。

板から石へ 井戸は地面を深く掘るので、壁が崩れやすいです。そこで多くの場合、井戸の壁面に

は井戸枠を施さなければなりません。井戸は日本では弥生時代から使われ始めますが、井戸枠には主に木材が用いられました。しかし私たちが知っている古井戸は、多くは石を積んで作られてはいませんか？つまりある時、井戸は板作りから石作りになったということです（写真1）。それはいつのことでしょうか。板から石への井戸の変貌、それは京都においては鎌倉時代のできごとでした。

変化は京の北から とはいえ鎌倉時代に井戸の作りが一斉に板から石へと変化したわけではありません。変化は少しずつ訪れるのです。発掘調査で見つかった鎌倉時

代の井戸を調べてみますと、まだまだ主流は板の井戸です。石の井戸は、北は一条通、東は寺町通、南は七条通、西は千本通の範囲にしかありません。また、板の井戸と拮抗するほど石の井戸が見つかる範囲はさらに狭く、北は一条通、東は寺町通、南は松原通、西は大宮通付近となります。当時の京都は平安京の右京が廃れ、市街地は千本通から東側に広がっているだけです。これを平安京と区別して単に「京」と名付けますと、石の井戸は鎌倉時代においては京の北半のみに色濃く分布しているといえましょう（図1）。以下では、その理由を探ってみましょう。

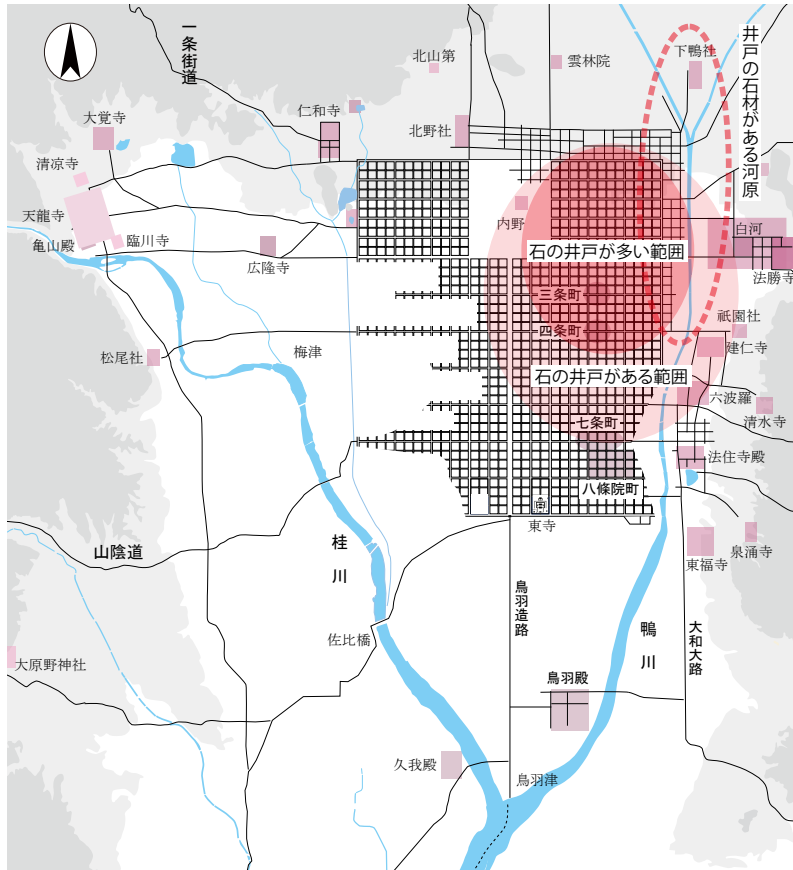


図1 鎌倉時代京都の石の井戸の分布範囲（上村和直氏の原因に加筆）



写真2 鴨川デルタ付近の石の状況

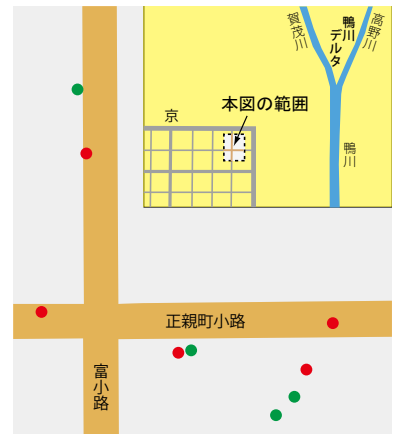


図2 路上で検出された石の井戸（●が石、●が板の井戸）

川の石を調べる 石の井戸に用いられている石を見てみると、大きさは長軸 30 cm 程度のものが多いです。また、いずれも角がとれて丸くなっている自然石で、大きな石材を割ったものではありません。このことから、石の井戸の石材は、河原にある石であると思われます。そこで、鴨川水系の河原を歩いて、井戸に用いられる石材がどのあたりで得られるのか調べてみました。そうしますと、石の井戸を作るのに理想的な長軸 30cm 程度の石は、高野川と賀茂川が合流する鴨川デルタとその上流に豊富で、それより下流にいくにしたがい石が小さくなり、採取が難しくなることが分かりました。大きな石が水流で運ばれるのは大雨の時と考えられますが、とりわけ 2 つの川が合流する鴨川デルタ

付近では一時的に流速が弱まるものと見え、ここに大ぶりの石が多く残されたのでしょう。井戸作りに理想的な石材がきわめて豊富なのです（写真 2）。鎌倉時代の石の井戸の石材の多くは、鴨川デルタとそのやや下流で採取されたようです。石の井戸が京の北半に多い理由は、このあたりに求められそうです。

石の井戸を作ったのは 京都御苑内にある京都迎賓館の発掘調査では、鎌倉時代の井戸が 9 基見つっていますが、そのうち 5 基が石の井戸で、板の井戸の数を上まわります（図 2）。この場所は京の北東部にあたり、良好な井戸石材の供給場所であった鴨川デルタに最も近い市街地だったといえます。当時の河原は現在の河原町通付近まで広がっていたでしょうから、ほ

んの 200 m ほど東に歩けば井戸の石材が得られたはずでした。ところで、ここで見つかった 5 基の石の井戸のうち 1 基は南北方向の富小路の路上に、2 基は東西方向の正親町小路の路上に作られたものでした。道路はそもそも移動のための空間で役所の管理下にある場所ですから、井戸は作れないはずです。路上に作られた井戸は、おそらく道路沿いを不法に占拠し、小さな家而建て居住した住民たちの共同井戸だったことでしょう。住民たちは自ら井戸の穴を掘り、皆で河原の石を拾い、井戸枠を作ったのでしょう。京における石の井戸は、このような庶民の共同井戸から始まったと考えられます。室町時代以降、京内の井戸はほとんどが石の井戸となります。

（内田好昭）